

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 28 日現在

機関番号：34510

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720160

研究課題名(和文) 狂気と寄生者 『ラモアの甥』読解を起点にしたディドロの非人間概念に関する考察

研究課題名(英文) Madeness and parasite in Diderot's thought -- on his several concepts of inhuman, typically represented in "Rameau's Nephew".

研究代表者

大橋 完太郎 (OHASHI, Kantaro)

神戸女学院大学・文学部・准教授

研究者番号：40459285

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果として主に二つのものをあげることができる。1)ディドロの非人間的概念が現代の哲学に対して持ちうる有効な射程を確認することができた。2)18世紀を中心的背景とした歴史的な読解においても、ディドロの思想がもつ独自の意味を提起することができた。1)については、リオタールの「非人間的概念」の中核にあるディドロの唯物論の有効性を人間技術との関係において明らかにすることができた。2)についても、当時主流であった奢侈についての議論に加えて、ディドロが自らの哲学の固有性として「貧なるもの」の可能性を担保していたことが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：We can conclude the two chief achievements through this research project. One thing is that Diderot's materialism, above all his idea of continuity between materials and living things, can be applied to criticize modern catastrophic situation of human technology. We don't know how to manipulate high technological machine which may go beyond our control, as the nuclear power does. Diderot's thesis on arts (technology) reveals this monstrous possibility of human being, and it leads us to invent our moral control which is in itself contained in constitution of human being as material order. The second is that we can find a new key concept of Diderot's philosophy; the idea of poverty. Poverty serves, in his thought, as one of the limits against the material flows which constantly grows and develops, helped by the technological power of human agent. Through the philosophical and historical analyses of Diderot's text, we can posit the importance of madness and poverty in Diderot.

研究分野：フランス思想

キーワード：唯物論 啓蒙思想 怪物性 技芸 = 芸術 寄生、貧困

1. 研究開始当初の背景

本研究の背景としては、以下の二点があげられる。

(1) デイドロ研究の歴史的展開において、今日、新しい観点からのデイドロ読解が大きく進み、哲学者・思想家としてのデイドロ像の立て直しが進んでいる点がある。とりわけ1960年代、のジャック・ブルーストをはじめとする一連の研究者たちの仕事以降、18世紀フランス啓蒙思想に発する近代の思想の展開におけるデイドロの占める役割は一変した。デイドロは従来まで考えられてきたような『百科全書』編纂者や戯曲の作家という狭義の「フランス文学」の作者の立場にとどまるものではなく、生物学や化学に着想を受けて、独自の唯物論哲学を提唱した思想家であるという点が、18世紀フランスを中心とした地下文書やリベルタン文学、あるいはその他の多くの著作家の著作といった資料的な充実、それに基づくフランス近代の哲学史的潮流や定説の見直し、さらには『百科全書』の典拠研究といった、近年めざましく進展した研究動向を通じて明らかになってきた。

(2) 哲学史・思想史的に見ても、デイドロ受容の現代的側面において、未解決の思想的課題が存在している。すなわち、ミシェル・フーコーやジャン・フランソワ・リオタールといったフランスの現代思想家の著作において、『ダランベールの夢』や『ラモーの甥』で表明されているデイドロの思考に対して高い重要性が認められてはいるものの、その理由が、著者であるフーコーやリオタール自身によっても、あるいはそれ以降の思想研究によってもはっきりと説明されてこなかった。これらのことは、近代、あるいは近代批判としてのポストモダン哲学者たちにとって、デイドロの思想が近代にも近代批判にも単純に回収することができない立場であることを意味している。言い換えれば、今日までの近代批判の盲点を、デイドロの思想は指摘しうるものではないだろう。

2. 研究の目的

本研究の目的は、啓蒙思想家デイドロの主著とみなされてきた『ラモーの甥』の読解を端緒に、デイドロの思想を「非人間的なものへの志向」としてとらえ直すことである。『ラモーの甥』における「狂人」および「寄食者」という特徴的な二つの形象に注目することから始め、この二者の連関を分析することを通じて、デイドロ固有の「非人間的」な哲学の存在を明らかにする。このデイドロ固有の思考が、歴史哲学や社会哲学へと姿を変えつつ、デイドロの後期著作に一貫して存在していることも証明したい。最終的にはこの「非人間的」哲学を現代思想における脱人間主義

と比較することで、デイドロの思想に備わっていた現代性を明らかにすることも試みたいと思う。

3. 研究の方法

研究方法としては、以下の三点をあげることができる。

(1) 本研究の中心となる分析対象である『ラモーの甥』の読解を深化させるために、当時のデイドロの関連資料や著作を精査する。とりわけ『ラモーの甥』が書かれた時期だと推定される1760年代に焦点を当て、書簡や百科全書の項目などを網羅的に精査する。

(2) 『ラモーの甥』を中心に、デイドロの執筆当時の社会における、「狂人」および「寄食者」という社会存在についての資料を入手し、18世紀における彼ら彼女らが置かれていた状況について、歴史的、とりわけ社会史的な文脈から理解する。フランス、パリの国立図書館にて、18世紀当時の社会状況を明らかにする文献資料(原典ないしは研究書)を入手し、そこから分析を始める。

(3) フランスの現代思想において提示されたデイドロの思想が果たした思想史的な役割について、その意義を明確化する。具体的には、フーコーの『狂気の歴史』やリオタールの『非人間的なもの』を中心的な対象として読解し、その影響関係や受容の仕方、概念的な重要性を検討する。

4. 研究成果

主な研究成果として、以下の三点をあげることができる。

(1) 哲学・思想的な観点からの成果としては、リオタールが「非人間的なもの」で著した思考とデイドロの思考の内実との関連を基点として考察することで、デイドロの思考がもつ現代的な意義の一つの側面が明らかになった。より具体的に言えば、デイドロが『ダランベールの夢』で提示している関係性に基づく唯物論哲学が、差異と主体化に基づいた今日の哲学的主流の批判として成立しうるということが明らかとなった。また、それが単なる哲学的な学説に対する批判的見解にとどまることなく、今日にまで続いている資本主義的な体制、およびそれに伴って発展を続けている人間技術に対して疑うことのできない信頼をおく今日の社会に対する批判としてきわめて有効な視点を提供しうるものであることが判明した。

(2) 「寄食者」と「狂人」という形象に焦点を当てた研究については、歴史的な資料の

探索をおこない、文献資料の充実という点で今後の研究につながる成果を収めることができた。とりわけ、フランスの国立図書館において、『ラモーの甥』の成立に関わる書簡や関連作品、時代の証言などを網羅的に収集することができた。また他方で、17世紀から18世紀のアンシャンレジーム期のフランスにおける、狂人に対する医学的知見と医療制度さらにはそこから啓蒙期に成立した人類愛（博愛概念）philanthropieの歴史的展開を見る中で、寄食者の道徳的な悪ともみなされうる窮乏状態の中に哲学的な真理を見出すデイドロの思考の独自性を考えることができた。こうした資料をもとに、デイドロの思考の中で寄食者の貧困がもつ意味を精査し、デイドロ固有の貧困の美学の諸相を明らかにすることができた。（この成果は2015年7月にロッテルダム・エラスムス大学（オランダ）にておこなわれる国際18世紀学会で発表される予定である。）

（3）上記の二つの方向性で研究を進めた結果、派生的に生じた成果として以下の二つのものがあげられる。

本研究では、18世紀フランスにおけるリベルタン文学を対象にして寄食者の道徳的悪行について考えたが、その際、マルキ・ド・サドについて、「怪物」という概念に関するデイドロとは異なる問題設定を着想することができ、論考を上梓することができた。サドの言説における内容としての道徳的悪と形式としての真理の表明の乖離を指摘したこの論考においては、自らの悪に誠実であるサドの「誠実な」リベルタン像を提示することができた。これにより、不穏さと非道徳性に満ちた革命前の風俗が、それでも「正義」の名の下に王政を批判することができるという、歴史的エートスを考えることが可能となる。

当時の医学について、自然学との交点から調査を続けた結果、16世紀から17世紀にかけてのフランスの王立植物園の成立をめぐる歴史学的論考を上梓することができた。ビュフォン以前の自然史・博物学の領域に、すでに反ソルボンヌ的な潮流としての医科学的見解が提唱されていたことが明らかになった。この医科学的傾向がのちのデイドロやドルバックへの唯物論と共通性が高いという点は、注目すべき発見である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 5 件)

大橋完太郎、「寄食者たちのテーブル—食卓を囲むルソーとデイドロ」(査読無)『現代思想』、2012年10月号、vol.40-13、172-183ページ。

大橋完太郎、「デイドロとフランス現代思想：リオタール『非人間的なもの』との関係から」(査読有)『フランス哲学・思想研究』、18号、2013年9月、3-15ページ。

大橋完太郎、「パントマイムする身体の相—『劇詩論』と『ラモーの甥』から」(査読無)『思想』、1076号、2013年12月、232-250ページ。

大橋完太郎、「サド、あるいは心からの嘘—『閨房哲学』における言説と怪物をめくって」(査読無)『ユリイカ』、2014年9月号、2014年、193-200頁。

大橋完太郎、「近代フランスにおける王立庭園の創設—ラ・ブロスからファゴンの時代」(査読有)『ガーデン研究会ジャーナル』、第1号、2015年3月、29-39ページ。

〔学会発表〕(計 4 件)

大橋完太郎、「デイドロとフランス現代思想：リオタール『非人間的なもの』との関係から」、日仏哲学会2012年秋季大会、シンポジウム「デイドロ哲学再考：生誕300年を迎えて」、東京大学本郷キャンパス（東京都文京区）2012年9月8日。

大橋完太郎、「断片化した生と突発的愛情—『ソフィー・ヴォラン宛書簡』にみる文体と情動の関係」、日本フランス語フランス文学会2014年度春季大会ワークショップ、お茶の水女子大学（東京都文京区）2014年5月25日。

大橋完太郎、「啓蒙の盲点、啓蒙批判の盲点」、第17回新潟哲学思想セミナー、新潟大学（新潟県新潟市）2014年7月18日。

OHASHI Kantaro, “L'enjeu philosophique de la pauvreté au siècle des Lumières – le cas de Diderot”, 14th International Congress for Eighteenth-Century Studies, Rotterdam, 27/07/2015-31/07/2015（発表確定）。

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

取得状況（計 0 件）

〔その他〕

・高校生向け公開講座(アウトリーチとして)
大橋完太郎、「今日における「啓蒙」の意義は何か—日仏比較思想史から考える」、灘高等学校土曜講座（2013年度後期）灘高等学校

校、2013年10月19日。

6．研究組織

(1)研究代表者

大橋 完太郎 (OHASHI, Kantaro)
神戸女学院大学・文学部・准教授
研究者番号：40459285

(2)研究分担者 なし

(3)連携研究者 なし